

## Youは何しにシドニーへ？

第7期 OG 松本 奈保子

炎熱の候、皆様いかがお過ごしでしょうか。真冬の2月に何を言っているのだという感じですが、私の住んでいるオーストラリアでは、現在夏真っ盛りでございます。南半球では季節が逆というのは本当に、サントクロースはトナカイの角がついたサーフボードで波に乗っていました。本当に。

すでに同期の方はご存知かと思いますが、昨年6月にオーストラリア・シドニーへと引っ越しました。海外に住むと言うと「目的意識があって、すごいね」と尊敬の眼差しを向けられることが多いのですが、実は渡豪の理由・目的は自分でも未だによく分かっていなかったりします…。

簡単にこれまでの経緯を説明すると、大学卒業後は、ボルテージという女性向け恋愛ゲームを制作している会社に就職。女性がときめく台詞100選や、最もイケメンに見えるポーズなどを研究する日々を送っていました。仕事は楽しかったものの、ベンチャーにありがちな深夜残業に負われる日々。そんな中、ある日山手線の最終列車で遭遇した「ヘンナガイジン」、もとい、ダニエル。お互い怪しい英語と日本語でコミュニケーションをとっているうちに仲良くなり、気がつけば彼の家族が住むオーストラリアと一緒に来ていました。



渡豪直前に三田で開かれた第7期同期会にて（著者は左手前）



グレートバリアーリーフにて（説明不要だと思うが、著者は左側）

元々20代のうちに海外で仕事がしたいという漠然した目標はあったものの、留学や駐在など、明確な意志を持って海外に羽ばたかされている先輩方とは違い、半ばノリで来てしまったかなりゆる〜い感じでの海外生活。

そんなノリで海外に住めるの？ というツッコミが入りそうですが、ワーキングホリデービザという、よく居酒屋のトイレにポスターが貼ってあるあの制度を利用すると、意外と簡単に海外に住むことができちゃうのです（先月マーケティングの学校に入学し、学生ビザになりましたが）。

オーストラリアでの生活は、みなさんがイメージする通り非常にゆったりしています。現在勤めている日豪プレスという出版社は、日本人が多いため、社内文化などはあまり日本と変わらないのですが、クライアントのオージーたちは「本当に仕事か？」と思うことがしばしば。上はピシッとスーツでキメているのに、足元だけぺらっぺらのビーチサンダルだったり、電話の締めが「Yep, sure, syo syo, bye〜！（うん、わかった、うんうん、バイバイ♪）」と超フレンドリーだったり、ゆるゆるオージーのエピソードは数限りなくあります。そんなオージーの生態と物価の高さ（電車の初乗りが約350円、コーラ500mlが約280円！平均年収も600万円超とかなり高いのですが）に戸惑いながらも、安定した気候で日本食が大ブーム（寿司屋の数は日本よりも多く、たまり醤油などのレアな調味料も普通のスーパーで売っています）のシド

ニーは非常に居心地がよく、ホームシックにかかることもなく日々快適に過ごしております。

…とまあこれだけですとオチも何もない内容になってしまいますので、最後に真面目な話をひとつ。先輩のみなさんの中にはいつか海外で働いてみたいという志を持っている方がいるかと思います。既にどこの国で何がしたいと具体的に決まっている人は良いのですが、私のように「何をするかは決まっていなくても、とりあえず行ってみたい」という漠然とした状態の方には、まずは日本で数年働いてキャリアを身につけ、しっかりと貯金すること（できれば200万円くらい）をお勧めします。キャリアと言っても、大企業に入ればOKという訳ではなく、職務経歴書に「自分は何ができるか」ということをしっかりと書けるように意識して日々の業務をこなす必要があります。「慶應卒で大手の〇〇社に勤務」と言えば日本ではある程度の評価をもらえますが、海外だと「慶應？ 〇〇社？ 聞いたことないけれど、結局あなたは何がどれくらいできるの？」とシビアかつ具体的に問われるため、ブランドに頼ることなく自分の能力と経験1つで勝負できるようにはなりません。それと意外にも、海外生活には常に将来の不安が付き纏うのですが、前職で重宝される人材になっておけば、いざとなれば前の会社に戻れるという安心感が得られます（これ、結構大事です！）。他にも、転職には前職の上司の推薦状が必要だったり日本にはない制度が色々ありますので、まずは言葉の心配がない日本で数年間全力で働き、評判と実力を高めることが大事だというのが私の考えです。…という訳で、偉そうな書き方になってしまいましたが、私の経験談が将来世界での活躍を夢見る誰かのお役に立てれば幸いです。



学会で渡豪された小野先生ご家族と第5期OBで大学院生の千葉さんと再会（著者は右端）